

## 「見えるところによらず、信仰によって」

お配りしております総会資料の「牧会報告」に書きましたように過去一年、私達は多くの兄弟姉妹を天に送りました。また毎月のようにどなたかが病院に入院されたり、手術をされたり、諸々の検査や治療がなされました。

これら健康に関することのみならず、私達は皆、日々、直面している色々な課題があります。平穏無事な日もありますが、それはいつまでも続くものではなく健康、家庭（日本にいる家族も含めて）、夫婦、子育て、仕事、経済・・・これらの課題から生じる諸々の問題が日夜、私達にはあります。そして、これらのことは大人だけに限定されるものではなくて、幼児にもティーンにも彼らなりのチャレンジが日々、あります。また目を外に向ければ、米国にも日本にも、世界のいたるところにも色々な緊張があり、それらを私達は日々、見聞きしています。

これらのことにもまれながら私達は毎日暮らしていますが、実際のところ信仰者に与えられている特権は、これら目に見えるものだけを全てとするのではなく、見えないものを見ているかの如く、神を信じ仰いでいくということです。

ゆえに今年は「見えるところによらず、信仰によって歩む」ということを私達の教会標語としました。この標語を私達は一年を通して、意識し、このことを土台とする生活の基盤というものを確立したいと願います。

聖書の時代の人々には、たとえば今日、私達が向き合っている大気汚染とかサイバー攻撃というようなチャレンジはありませんでした。しかし、今も私達が直面している問題、特にそれが自分の「心」と「体」に関する事、「人との関係」に関する事でありますのなら、彼らも私達と同じ課題を抱えて生きていました。そうです、彼らも私達と変わらずに日々、自分の目に見えるこれらのことに一喜一憂して生きていました。彼らも日々、自分の目の前を過ぎ去る出来事に心が揺さぶられました。

私達は日々、色々なものを見ながら生活しています。庭に目を向ければ、たわわになったトマトを見て、嬉しく感じますでしょう。翌日、そのトマトが何かしらの動物によって食べられてしまい、何もなくなっているのを見て、がっかりすることもありますでしょう。

2017年6月18日 「見えるところによらず、信仰によって」

インターネットのメールを読みますでしょう。立ち上がってガッツポーズをしたくなるようなメールを読むことがありますでしょう。打ちのめされてしまうような悲しいメールを読むこともありますでしょう。心が騒ぐようなメールもありますでしょう。

入院している家族、友人を訪問する時、その方の顔色がよく、回復している姿を見て安堵しますでしょう。しかし、時には回復の様子をうかがうことができずに、肩を落として帰ってくることもあるでしょう。

神は私達に二つの目を与えました。私達の感情は常にこの二つの眼を通して入ってくる光景によって引き上げられ、突き落とされるのです。そうです、私達は日々「見ていること」によって揺さぶられるのです。私達はこのことを人生において繰り返してきており、今もそうなのです。

私達の目はこれからも色々なことを見ていくことでしょう。その中には打ちのめされてしまうようなこともあるでしょう。しかし、私達のうちに「信仰」が芽生えていくのなら、そのところを必ず乗り越えていくことができると信じます。「見えないものを見る力」、もしそんな天来の力が私達に与えられるのなら、私達の人生はこれまでに思い描くことがなかったような人生の深さを教えてくれることでしょう。

しかし、こうお話ししながらも、「とは言っても結局は見えるものが全てでしょう」と思われる方もいることでしょう。ご存知でしょうか、実際のところ私達の世界は見えるものだけで成り立っているわけではないのです。私達は自分が見ている世界が全てだと思いますが、実際には私達が見えないものがこの世界には無数にあるのです。科学者はこの世界に実在しているもののうち、人間が肉眼で見えているものは20パーセントにすぎないと言います。そう、私達はこの世界に実際にあるものの20パーセントのものしか見ておりませんが、「見える者だけが確かなもので、それが全てだから」と言って生きているのです。喜びや悲しみを伝えるメールは無機質なスクリーンに記された活字です。確かにそれは私達にある情報を伝えます。しかし、そのメールの内容の背後にあるものを私達は見ていません。私達が見ているのはそれを伝えている文字と情報です。

たわわとなったトマト、その収穫を楽しみにしていた矢先のある晩、親子連れのポッサムがそのトマトを全て食べてしまったのかもしれない。彼らは人の耕作の苦勞を知るはずもなく、ただその本能に従い、私達が食を取り生きようとするように、その親子も目の前にあるトマトをお腹いっぱい食べたのです。このこと

2017年6月18日 「見えるところによらず、信仰によって」

を私達は目撃していませんが、こう考えれば同じ生きとし生ける者として、彼らの立場も理解できます。

いよいよ召されようとしている方のベッドの傍らにおります時に体験することができます。その方は既に周りにはいる者達とコミュニケーションをもつことができないような状態で目を閉じています。その時に絶望的な思いとなるのか、それとも主イエスに祈り、必ず主イエスが今、この人にあらわれ、語りかけていると信じるのか、そこには大きな違いがあります。

聖書の中には無数の人間が登場します。ヘブル書はその中で10人以上の人たちを取り上げています。彼らの名前は聖書の中ではよく知られた人達で、彼らの生きざまというものを私たちは知っています。彼らは確かに聖書の中で大切な足跡を残した人達ですが、決して完璧で模範的な人ではなく、時には失敗も繰り返した人達でした。しかし、そんな彼らもあるものを持ちつつ、その人生を歩きとおしました。彼らについてヘブル書はこう書いています。

13これらの人はみな、信仰をいだいて死んだ。まだ約束のものは受けていなかったが、はるかにそれを望み見て喜び、そして、地上では旅人であり寄留者であることを、自ら言いあらわした。14そう言いあらわすことによって、彼らがふるさとを求めていることを示している。15もしその出てきた所のことを考えていたなら、帰る機会があったであろう。16しかし実際、彼らが望んでいたのは、もっと良い、天にあるふるさとであった。だから神は、彼らの神と呼ばれても、それを恥とはされなかった。事実、神は彼らのために、都を用意されていたのである（ヘブル11章13節－16節）。

彼らは私達と同じように与えられている人生を生きていった人達です。彼らにも悩みあり、喜びあり、勝利あり、敗北がありました。彼らは私達が日々、直面するようなことにも直面したに違いありません。確かに彼らは当初、私達と同じように目に見えるものだけに心を奪われるような数えきれない日々を過ごしながら、その中で信仰を学んだのです。そうです、信仰とは見えないものを望み見ることです。彼らの目にそれは見えないのですが、あたかも彼らの目の前に備えられていることを見ているかのようにして、そのものに向かって彼らは一日一日と歩を進めたのです。そう、彼らは天にあるふるさとを見上げつつ生きました。

この度の『見えるところによらず、信仰によって歩む』という今年の教会標語は聖書、第二コリント4章18節の『わたしたちは、見えるものではなく、見え

2017年6月18日 「見えるところによらず、信仰によって」

ないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである』からとりました。

そのものが価値あるかないかということを決める時に私達はそれがどれだけ長持ちするのか、どれだけ後世に残るのかということを考えます。テンポラリーなものはやはりチープです。しかし、長くもつものにはそれなりの価値を私達は認めます。一つ確実なことをお話ししましょう。私達が今、見ているものは全て過ぎゆくものです。私達を悩ます出来事は過ぎ去ります。私達が喉から手が出るほどに欲しいと願い、獲得にいたったものも必ずいつか失われます。目に見えるものは全て一時的なものなのです。

私達が見ているものは一時的です。新築の家も樹齢1000年にもなる大木も全て一時的なものなのです。どんなに気難しい人が自分の前にいて、私達を悩まして、それも一時的なものなのです。ですから、このようなテンポラリーなものから聖書は私達の目を別のものに向けさせます。見えないものは永久に残るからです。

この度、修養会で「終活」、すなわち「私達の人生の終わりについて備える」ということについてお話をすることになっており、このことを最近、思いめぐらしていた時に、気づかされていることがあります。その日に近づいている私達が日ごとに養うべきことは、実にこの目に見えないものに目を注ぐということではないだろうか。

若い時は見えることだけで諸々の判断をしていました。しかし、年齢を重ねていくと、見えているものだけでこの世界は成り立っているわけではないということに気がつかされていきます。見えるものだけに振り回されて生きるのではなく、見えない世界を垣間見させていただくように、その目を養っていくことこそが、この終活に必要なのではないだろうかと思えるのです。見えないものは永久に続くというのであるのなら、やはり私達の視点を変えるべきではないかと思うのですが、いかがでしょうか。そこには絶大な価値があるのですから。

世界で最も知られていた無神論者（この世界に神などは存在しないと主張する人）に、バートランド・ラッセルという人がいました。彼はかつてこんな質問をされました「もし、あなたが死後、自分の主義が間違っていたと判明し、自分が天国の前に立っていたら何と言いますか」彼は目を輝かせ、かん高い声で答えた。「そりゃー、こう言いますよ。神よ、あなたは十分な証拠をくれなかったじゃないですか」

2017年6月18日 「見えるところによらず、信仰によって」

彼がかん高い声で答えた時、彼はしてやったと思ったに違いありません。しかし、このラッセルの言葉に対して私達は思うのです。「あなたはあなたを取り囲んでいる無数の証拠を見ようとはしなかった」。

神様は見えないお方です。先々週、お話ししました聖霊もそうでしょう。聖霊は風だとお話ししました。風には色がついていませんから見えませんね。しかし、風が巻き上がって竜巻となりますと風が諸々の物を空中に引き上げますので、私達はその風を見ることが出来ます。目の前で揺れている木の葉は風があることの証拠となります。聖霊もそうなのです。私達には見えませんが、聖霊のはたらきを私達は見る事ができるのです。

最近、夫婦共々、筋トレを始めました。少しでも長く、最善のコンディションでミニストリーと向きあっていきたいと思えます。しかし、急に筋トレをしたら体を壊します。また今日がんばった筋トレの効果が明日、見えるかたちであらわれるわけでもありません。同じように見えないものを見るということ、急にそれができるはずもありません。信仰と不信仰の間を行き来しながら、私達は聖書が言っていることに納得しながら、自分の見解の小ささに何度も気がつかされ、見えないものを見つつ、生きることを学ぶのです。

先に読みましたヘブル人への手紙の著者は信仰にこだわります。そして言います。『わが義人は信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしの魂はこれを喜ばない。しかしわたしたちは信仰を捨てて滅びる者ではなく、信仰に立って、命を得る者である』（ヘブル10章39節）。

お見受けする限り、私達は皆、信仰に立って、目に見えないものに目を注いで生きる生き方へとシフトする時が来ているのではないのでしょうか。皆さんと共にこの信仰の目を養っていくことができること、このことを楽しみにしています。お祈りしましょう。